

南イタリアのロンゴバルドの女王, アデルペルガ

楠 田 直 樹

はじめに…ドロテア・メモリ・アピチェッラ女史との出会い

前稿で、青春時代に至るまでのアデルペルガの生い立ちについて述べてきました。この稿ではそれ以後の彼女について詳述していきたいと思います。まずアデルペルガのベネヴェント到着時の事柄を若干述べ、その当時のイタリア半島での状況に若干触れ、ベネヴェントの状況と照合してみたいと思います。

前稿では、書き忘れましたが、そもそもアデルペルガを調べてみようと思ったのは、数年前に『漫画サレルノ史La storia di Salerno a fumetti』がサレルノで刊行され、その最初にアデルペルガ〔漫画ではアデルペルガになっていません〕が登場したことが大きなきっかけです。ある意味で、サレルノという町を古代から現代まで簡便に理解するためには、かなりよくできたものだと思います。

この論考を書いている最中の2007年8月27日に、イタリア・サレルノでアデルペルガの伝記を書いた作者ドロテア・メモリ・アピチェッラDorotea Memoli Apicella女史と会うという幸運な機会をえました。女史は大変な日本びいきで三十数年前に来日していました。その後執筆活動を開始し、自らの教える学生たちが理解できる簡便な言葉で、話しかけるように執筆したのが、『アデルペルガAdelperga』(Salerno [Società salernitana di storia patria], 2004[2nd ed.])だと語っていたのが印象的でした。ともかく、女史の作品をべ

ースにして自分なりに解釈を推し進めていきたいとします。この作品については、前稿ではほとんど触れる機会がありませんでしたが、その後よくできた作品だということがわかったので、できれば会う機会があればと考えていたところでした。

最後に、女史から与えられたBrescia oggiという地方紙の2006年11月26日付けの文化欄Cultura e spettacoliに記載されたアゴスティーノ・マントヴァーニAgostino Mantovani氏の記事の一部（41面）を付加しておきたいとします。これはベネヴェント・サレルノのロンゴバルド史の中に見られるエルメンガルダErmengardaとアデルベルガについてのものです。フランスの中世史の大家ジャック・ル・ゴフJacques Le Goff教授によって語られることになった18世紀の作品とされる一枚の絵画、エルメンガルダの最後の場面に関するものです。その中のアデルベルガについて書かれた部分を付け加えたいとします。

その見出しには、ブレッシャ出自のあの二人の姉妹、ベネヴェント・サレルノからサンタ・ジュリアに至るロンゴバルド史のエルメンガルダとアデルベルガとあります。その第五段落からです。「アデルベルガにはエルメンガルダに続いていかなければならなかった道程がありました。しかし、実際には、彼女はすでに歴史の表舞台に飛び出していました。それはサルレノの教授で研究者であるドロテア・メモリ・アピチェッラ女史の作品のおかげです。女史はこのロンゴバルドの女王の道程に歴史学的文献学的な探究をすすめ、詳細な部分にまで触れ、再認識させてくれました。そしてすばらしい書物『アデルベルガ、サレルノのロンゴバルドの女王』になりました。この書物を通して当時の様子を再構成するとともに、『中世の女性』像をも浮き彫りにしました。小ロンゴバルド王国での生活、芸術、文化の豊かで繁栄した中心地としてのサレルノの歴史的社会的環境にまで立ち入っています。そこでアデルベルガは女性の、花嫁の、母親の、女王の役割の中で偉大な主人公を演じていました。（趣意）」とあるように、アデルベルガの占める歴史的な位置そのものがイタリア半島での中世を語っていく上で大切だということが理解できるはずです。そして女史の書物の出来映えを賞賛しています。さらに使用している史料にも、かなり限定

される中、巧みに使用しているところにも関心があります。

1. 当時のベネヴェントの様子を中心に

彼女のベネヴェントへの到着は、とりわけ聖職者たちはもちろんのこと、その地域で洗練され教養のある人々の階層では、快く受け入れられました。それはパオロ・ディアコノ Paolo Diacono の存在が大きかったとはいえ、待望されていたことだったということを示唆しています。アデルベルガとパオロ・ディアコノの到着は、事実ベネヴェントにとっては、学識ある都市パヴィアを越えるものとして見做されていました。エルケンペルト Erchemperto にしろパオロ・ディアコノにしろ、パヴィアに存在していた学派について語り、その当時の文書の中に見られるように、マエストロ（師匠）としての称号をほしいままにしていた人物でした¹⁾。そのうえ、アレーキの学識や彼の文芸者保護についてもさまざま語っていました。さらに、ディアコノは、アレーキについて、彼のもつ倫理性、論理性、医学知識や宗教性について明言し、また詩篇や交誦詩篇を巧みに叙述していたことをも語っていました。

アデルベルガは、ベネヴェントでその温暖ではない気候に睥睨していましたが、その都市に溢れる文化教養の息吹には驚嘆していました。そこで、彼女は古典の勉強、とりわけキケローやウェルギリウスの研究を続けることになりました。当然ギリシア語と聖書への探求を棄ててしまったわけではありませんでした。そのとき、ディアコノはアレーキの才覚にも光を当てていました。都市の再建拡大事業では、彼を擁護していました。その事業の中には、都市壁の再構築、ローマ時代の古い建築物の修復、聖ソフィア寺院の建立、さらには現在でもまだ定かではありませんが、消失したパラティウムの建設あるいは移転などの事業がありました。その聖ソフィア寺院の片腹には夜になって祈祷に訪れることのできる寺院も付属していました。この寺院については、ロンゴバルドの人々の奉納礼拝堂建立を決心したアレーキの特別の想いによって王宮教会のさまざまな特性を備えたものだったと述べる人もいます²⁾。その聖ソフィア寺院は、パロス島産の白い大理石で覆われ、ユスティニアヌス帝によって建立さ

れたコンスタンティノポリスの同名寺院の原型だといわれています。その一方で、都市の中心にはパヴィアの聖マリア・イン・ペルティカ寺院があったともいわれています。

このような教会に、アレーキは、モンテカッシーノの僧院に委任した女子修道院を付属させていました。こうして複合的な記念建築物を建立し、南イタリアの政治的な中心地であるとともに、宗教性の中心地としての役割を帯びさせていきました。その修道院の初代尼僧院長にはアレーキの妹のアデルジーザ Adelgisaが就任しました。このようにして、アレーキは、聖ソフィア寺院を南イタリア全域から集められた多数のレリーフで飾りました³⁾。ロンゴバルドの人々はレリーフを共有財産として、公共の教会に飾られるものと考えていたふしがあります⁴⁾。

ここではっきりと洞察されることは、アレーキが妻アデルペルガから鼓舞された宗教的、愛国的な熱意に支えられていたこと、そしてその血統に見え隠れする敬虔さや愛着心に似通っていた伝統をもつ家系から生じていたことなどです。例えば、アンサやデジデーリオが聖サルヴァトーレ寺院の建立を熱意と執着心で継続していたように、アデルペルガとアレーキも聖ソフィア寺院の建立とその宗教的な複合体の発展に熱意を注いでいました。また、彼女のその領土への、そして森林公園の緑への郷愁心から掌握されるように、彼女は東方的な栄華を湛えた快適な庭園の創設を望んでいました。その庭園創設には、継続的に300人の奴隷が従事し、二人の出会いに至るまで大きな空間を占めていました⁵⁾。

763年には、パオロ・ディアコノがアデルペルガをほめたたえて、折句的な頌歌を書いています。そこで詩連ごとの最初の文字に、Adelperga piaの表現を用いています⁶⁾。デジデーリオ王の初期の統治、すなわち息子アデルキとの共同統治の時期をほめたたえ、アデルペルガとアレーキの結びつきの栄光を賞揚していました。また、このディアコノは、766年から769年にかけて、アデルペルガのために“Epistola” [『書簡集』] を叙述しています。それは『ローマ史Historia Romana』の序として彼女に捧げられたものでした⁷⁾。この書簡の

中で、ベネヴェントでのディアコノ自身の滞在の静穏な雰囲気を受けています。そしてさらには、彼らがその地に逗留するために、科学や文学の熱情を注ぐことができる資料が収集されていたことも述べています。Domna Adelpergaの挿絵の中に、謙虚なパオロ・ディアコノは、さまざまな分野での広い知識を認めつつ、彼女の質問に答えながら、ウォレンスの帝国までの話で留まっていた、後4世紀の歴史家エウトロピウスの『Breviarium』をもとに話を広げていったことを公言していました。エウトロピウスに対して、ディアコノはユスティニアヌス帝の時代にまで話を広げ、聖書上の関心の高い話をその歴史の解釈の中に挿入していきました。その『書簡集』の末尾に、国王親族への挨拶を付加していました⁸⁾。

パオロ・ディアコノが使用していた史料は、エウトロピウスの後を続けて叙述していたキリスト教徒の作者のものでした。その中心にあったのが、オロシウスの作品であり、ヒエロニムスのものでしたし、そのほかソリヌスやフロンティヌスのものも使用していました⁹⁾。

このように、ベネヴェントの宮廷の気高い平和の中で、快適な研究論考の時代、信仰心の厚い時代、堂々とした意図を目論んだ時代が過ごせたのでしょうか。幸せにすくすくと育っていく一家の子供たちに、日々元気づけられていました。パヴィア滅亡以前の16年間で、聖エリアーノの戦利品を届けるべく、かつデジデーリオ王の側からビザンツとの協定を締結すべく、アレーキのコンスタンティノポリス遠征のみが、出来事として知られています。それはとりもなおさずベネヴェントがいかに静穏で平和であったかを物語っているのではないのでしょうか。このベネヴェントにおける時代の雰囲気が彼女に何かをもたらしていたことは間違いありませんし、それまで築かれてきた彼女の性格をより強固なものにしていったのではないのでしょうか。

2. ロンゴバルドを取り巻く情勢とデジデーリオ王の外交

そうこうするうちに、ロンゴバルドに、パヴィアと結びついた家族に、そしてパオロ・ディアコノ自身にも罣が準備されていました。しかし、デジデーリ

オ王は、王国の不安定さを考慮しつつ、北側ではフランク族に圧迫され、南側では教皇領が誕生していくという状況の中で、王国民に安定性を与えるために、隣国との外交交渉を巧みに作り上げていました。

ここで、ロンゴバルドを取り巻く環境とその起源、当時の歴史的な流れを俯瞰しておきたいと思います。ただ、人名や地名はできる限りイタリア語表記に統一しておきたいと思います。

王はロンゴバルド族とフランク族との間にその起源の類似性を熟慮していました。もともとロンゴバルド族は、ゲルマン族の一部族で、最初ドナウ川とエルベ川上流との間に逗留し、それからパンノニア（現在のハンガリー）地方に移動し、イタリアにやってきました。それに対して、フランク族は、ゲルマン族のさまざまな部族の混成部族で、ローマ領ガリアのライン川地方の出身で、ガリア地方にいたローマ人と混成しました。ロンゴバルド族は、宗教的にはアリウス派に改宗し、かなりのちになってカトリックに改宗するというふうに、彼らの伝統を長く継承していました。一方、フランク族は、最初の王クロドヴェオClodoveoによって、すぐにカトリックに改宗し、ローマ教皇との結びつきを次第に強固なものにしていきました。そしてこの新たな「蛮族」的ローマ国家はカトリック教会の長子として、「教会の歴史的使命への唯一の方向」だと考えられるようになりました¹⁰⁾。もともとゲルマン系の二つの部族は、ピピン短身王Pipino il Breveの父カール・マルテルCarlo MartelloとリウトブランドLiutprandoとの間の真の友好関係で結びついた時代を共有していました。その考えの奥底には、デジデーリオ王が自らの王国を強化すべく、フランク族と同盟しようとする考えをそっと忍ばせ始めていました。

そんな中で、ピピン短身王が亡くなりました。その死後、カルロCarloとカルロマンノCarlomannoという二人の息子たちに領土を分割していましたが、息子たちの不和が表面化していきました。それは彼ら二人に遺された領土に対する不満からでした。カルロには、ピレネーからフリシア（現在のオランダ）に至る大西洋に面した領域、すなわちネウストリアNeustriaやアウストラシアAustrasiaの古い王国領からボヘミアの森に至るゲルマニアの中央部までの領

土が遺されていました。一方，カルロマンノには，地中海沿岸に至るまでのガリアの中心部，ドナウ川上流南部のアレマンノ Alemagna といった旧ローマ属州が遺されていました。ただ，カルロは地中海への道が閉ざされたことに不満をもち，カルロマンノは先祖代々の領地が与えられなかったことに不満を抱いていました。しかし，二人ともローマのパトリキウスで，教会外護の役目を負っていました。

ここで登場してくるのが彼らの高貴な母ベルタ Berta です。彼女は，息子たちの気持ちを和らげ，外交手段で憤慨を追い払うべく，生き生きとした知識と平和を望む気持ちで干渉していきました。その外交手段とは，ロンゴバルドの同盟をデジデーリオ王の娘たちと自分の子息たちとの結婚を通して築こうとするものでした。すなわち，カルロはデジデラータと，カルロマンノは恐らくイルミンガルダかジゼッラ・アデルキ Gisella Adelchi と政略的に結婚させるというものでした。

ただ教皇ステファノ 3 世はこの計画に脅威をもっていました。教皇は当時の教会権力を危険に晒すものだと考えていました。そこで，ピピンの息子たちに書簡を送りました。彼らの結びつきを制止し，「彼らが幼児のときに聖ピエトロの墳墓で，教皇の親友の中の親友であり，教皇の敵の敵である」ということに忠誠を示していたことを思い起こさせました¹¹⁾。カルロマンノは教皇に破門されることを望んでおらず，カルロは母親の計画を支持するという正反対の行動に出ました。活動的なベルタは，これ以外の利点をも確信していました。それはデジデーリオの娘の中でリウトベルガがバイエルンのタッシローネ 3 世 Tassilone III とすでに結婚していたことでした。だから，このような結びつきがバイエルンとフランク族との和解の一因になるであろうと考えていました。

カルロは政治的な要因で母の行動に味方しました。ともかく，ピピンが遺した王国分割の中で，当時のヨーロッパの政治に関して中心的な役割を担っていた地中海やイタリア半島との直接的な関係から除外されていたことが大きな要因を占めていました。ベルタは，770年夏に，外交のための旅を開始しました。まずバイエルンに赴き，タッシローネと邂逅し，次いで聖ピエトロの墳墓を訪

れ、教皇に会うべくローマに赴きました。そこで教皇に議論を尽くして結婚の承認を求めました。カルロとデジデラータの結婚については何の阻害もありませんでした。しかし、ジゼッラについては、教皇の不服に譲歩し、別の結婚を申し出ざるをえませんでした。そのうえ、ベルタは教皇に書記のイッテリオ Itterio をベネヴェント公国に派遣する約束をさせられました¹²⁾。その旅の終わりに、デジデラータの手を経て公式文書をデジデーリオに渡すべく、パヴィアに赴きました。その文書には信義関係 foedus を保障したフランク族の貴族たちの荘厳な誓約が書かれてあり、アンサ自身も含んでいたサリ系フランク族の女性たちとともに若い女性を伴っていました。そして婚姻はこの年の数ヵ月後に祝われることになりました。

しかし、カルロマンノの死後カルロが全支配領土を所有したので、事態は急速に悪化していきました。カルロマンノの未亡人ジェルベルガ Gerberga と息子たち、臣下たちは、イタリア半島のロンゴバルドの宮廷で押し黙るようによく要求されながらも、そこでの立場を獲得していました。ちょうどその頃、カルロは母ベルタの意図に反してデジデラータと離婚してしまいました。デジデーリオは、冬の最中にアルプスを通して苦悩に満ち、不便な長旅に精根尽き果て、なおかつ妊娠していた娘がパヴィアに戻ってくることに理解を示していました¹³⁾。この離婚の原因に関して、その時代の人々にもカルロの側近たちにも是認されていたように、神秘的なものが横たわっていましたが、もっとも一般的な説明はデジデーリオからカルロマンノの家族に寄せられた敵意にカルロの苛立った反応であったというものです。デジデーリオに向けられた敵愾心はもう修復不能でした。カルロは離婚直後にもうスワヴィア家の王女イルデガルダ Ildegarda との新たな婚姻に着手していました。そんな中、このデジデラータの死の知らせがベネヴェントにも達しました。そして771年の冬にアデルベルガは自らの意思でブレッシェに出発せざるをえなくなりました。幼少期に幸せな時代を過ごしたブレッシェの聖サルヴァトーレ修道院に戻りました。そこでは彼女は何度も自らの学究に使っていた豪華な図書館に、あるいはよく遊んでいた庭園にいったことが頭を走馬燈の如く横切ったはずですが、しかし、今はデ

ジデラータの死に面した苦悩が、中庭の回廊に通じる長い廊下を歩く中で、彼女の気持ちを落胆させていたはず¹⁴⁾。

ここで、アデルベルガの内面の動きを少し総合的に記述することで、その当時の家族関係も含めて、推測しておきたいと思います。少しでも彼女の心の動きという襷に触れることが大切だと思うからです。

アデルベルガは突然その寝床の足下に、苦悩のもとになっていた死体のもとで立ち止まりました。アデルベルガとアンシルベルガは無言のうちに、満面に涙を湛えて、苦悶と焦燥感で見つめていました。アデルベルガの心のうちにはウェルギリウスに登場してくる、アエネイアスに捨てられて死を望んだカルタゴの女王ディドーのイメージを描いて、自らを支えようとしていたようにも見えます¹⁵⁾。ウェルギリウスの作品の中の二人の登場人物の苦悩を喚起する中で、アデルベルガは、涙がゆっくりと頬を伝い、祈りで合わせていた両手で軽くそれを拭い去ったことすら無意識のうちになされていました。ただ彼女はデジデラータの顔に異なった兆候を読み取っていたのではないのでしょうか。生気のない顔は、神の静穏さの中で落ち着きを取り戻し、息を引き取る前に生命の犠牲を慮りました。そして虐げられた人々の将来の難事に目を向けていました¹⁶⁾。

アデルベルガの苦しみの解釈は、ウェルギリウスやマンゾーニの言い回しに合わせて、彼女が本来ロンゴバルドの人々がもつ大胆で情熱的な性格を引き合いに出して婉曲的に述べたような気がしてなりません。しかし、彼女の気持ちは、ディアコノから古典社会やキリスト教社会の優雅さに教育されて、自らの気持ちを制御し直し、デジデラータの哀れみ深い精神的な気持ちを、不運の復讐者として崇められていたアルカンジェロ・ミケーレへの祈りを捧げるふるまいに繋がりました。女王ベルタは、花嫁から慈しまれ、哀願されていた間に、彼女の死とフランク族の蔑みに号泣しました。しかし、これらの人々もデジデラータを愛惜し、彼女を王の真実の正統な配偶者と見做していたことも事実です。

3. ロンゴバルドの避難場所としてのベネヴェント

デジデーリオは、怒りと失望の頂点に達して、カルロマンノの息子たちがそ

の大義に立っており、彼らの父親の後継者として、教皇が彼らに水をさすように仕向けたかったようです。そして757年に教会に譲渡された領土を奪回し、ラヴェンナ包囲を引き締めることを望んでいました。しかし、新たな教皇アドリアーノ1世Adriano Iは、岩のように強固でした¹⁷⁾。実際、デジデーリオがもしもカルロマンノの息子たちに水をさすことに成功していたのなら、イタリア半島のローマ領やビザンツ領を獲得していたであろうし、ロンゴバルド王国のもとでイタリア半島の統一という夢を達成していたことでしょう。その夢こそがアウターリの、リウトブランドの、そしてアストルフォの夢にはほかならなかったはずです。教皇アドリアーノ1世は、それを見越していたからこそ、カルロに手助けを要請し、カルロはアルプスを越えて教会に対するデジデーリオの挑戦的政策を止めるべく長駆イタリアにやってきました。そして774年にほぼ10ヶ月の包囲戦の末にパヴィアでデジデーリオと彼の息子アデルキを打ち破りました。この年の6月5日に、デジデーリオと妻アンサは降伏のため、ロンゴバルド王位Rex Langobardorumを譲渡すべくカルロの陣営にやってきました。そしてカルロは6月7日にパヴィアに凱旋入場しました¹⁸⁾。

ただ、ベネヴェントのアレーキはそこには参加していませんでした。これがこののちのロンゴバルド族のイタリア半島での存続に繋がっていきます。

ともかく、カルロは、デジデーリオ、アンサそして彼らの子息たちを幽囚して、フランスに引き返しました。デジデーリオは、その残りの日々をコルビエCorbieの修道院で、“in vigiliis et orationibus et ieiuniis et multis bonis operibus”に、すなわち日常性をもとにして平静隠遁的な生活の中で過ごしました。一方、リウトベルガとアデルベルガは、王子と婚姻を結んでいたにもかかわらず、家族を助ける手立ては何もありませんでした。アデルキは、あちこち彷徨したあげく、コンスタンティノポリスに逃亡しました。アデルベルガは、このように家族が散り散りになった哀愁の中で、アルボイノがイタリアにやってきて以来205年間続いていた「大」ロンゴバルド王国Longobardia maiorの灯が消えていく悲哀を味わいました¹⁹⁾。アレーキ自身は、以前に自国の自立性がすでに存在していた地域で、自治を確実にする適切な土地を見出し、774年

11月にはベネヴェントの君主であることを宣言しました²⁰⁾。その君主国には、北部のロンゴバルド系の人々だけでなく、イタリア中部のスポレト公国などからも、フランク族の圧迫を望んでいなかった人々が移民してきました。公国から君主国への進化は、ある意味では、カルロマーニョの支配や教皇国家への挑戦であったのかもしれませんが。こうした衝撃的な行動全ての背後には、アレーキにとって、一敗地にまみれたデジデーリオの娘にして、異端者として殺害されたデジデラータの妹にして、ロンゴバルドの純粋な血統の子孫にして、なおかつ北部での衰亡からの再興の旗頭として見做されていたアデルベルガがいたからにはほかなりません。アデルベルガは、「小」ロンゴバルドの「象徴であり首都である」ベネヴェントが以前のパヴィアを髣髴とさせる都市Ticinum geminumになることを望んでいました²¹⁾。

アレーキ2世は、ここで「大」ロンゴバルドの権威を組織化する権力を備えており、それを発布することになりました。その時期には、ロンゴバルドの人々にとっては「約束された土地」としてイタリア半島の内外から、あたかも巡礼のようにこの地にやってきた多数の避難民がやってきたと考えられます。イタリア北部の各地、すなわちピエモンテ、リグリア、ロンバルディア、ヴェネト、エミリア、トスカーナそしてスポレトというフランク族の勢力が大きくなってきた地域や教皇国家からの移民が考えられます。そうした避難民たちは、ベネヴェントのアウレア門Porta Aureaで彼らの王女アデルベルガ自身に会っていた可能性があります。そこにはあらゆる社会階層の人々が含まれていました。貴族たちは新たな忠誠を告げ、庶民たちは新たな逗留を確保するとともに新たな仕事にありつけたはずです。避難民たちは失われた祖国への気持ちを、太陽と青々とした空気を湛えた半島南部のこの地で、再び獲得していきました。

むすびにかえて

いずれにせよ、アデルベルガはこのような不安定な状況の中で、パオロ・ディアコノの教えを尊び、自らを律し、民衆の中に入っていったようです。人々の中に、パオロ・ディアコノ、アデルベルガそしてアレーキ2世という三人の

精神性が、この王国の基盤として生き続けていくことになりました。そしてそれ以上に、伝統を愛おし続ける人々の気持ちがさらに高揚していったことでしょう。

アデルペルガは、夫アレーキ2世や生き残った人々のそばで、歴史的に学芸を司る神々の愛好家として形を変えながらも生き続けていきました。彼女自身が受けてきた文化や部族のもつ自尊心を植えつけていった息子たちを無視することはありませんでした。だから、夜毎に礼拝堂の片隅で祈禱を続けていたようです。日々困難に直面していたこの夫妻に有効な手助けが光臨することを聖サルヴァトーレに祈り続けていたのかもしれませんが。故人のために平和を懇願し、家族の破壊者への罰を懇願しつつ、彼女の記憶の中には、デジデラータへの想いがさらに深く刻まれていったことでしょう。その当時まだ南イタリアに蔓延としていたどこか牧歌的な雰囲気は、不安感や郷愁感を和らげていったことでしょう。

そんな中で、大ロンゴバルド王国の最後の女王でアデルペルガの母アンサがなくなります。アンサはカール大帝の北イタリア解放ののち、ベネヴェントのアデルペルガのもとに身を寄せて、残りの日々を過ごしていました。アンサの遺骸はブレッシャに持ち運ばれ、聖サルヴァトーレ僧院にあるデジデラータの墳墓の片腹に置かれました²²⁾。

アンサの息子アデルキがロンゴバルド族の唯一の希望の星となりました。娘たちは政略結婚などを通して大ロンゴバルド王国のあった周辺地域に嫁いでいました。例えば、アデルペルガはベネヴェント王国に、長女のアンシルペルガは神の国に嫁いでいました。このようにして、ベネヴェントの地にロンゴバルドの歴史の中で最も重要な女性の一人が嫁いでいくことになりました。それは大ロンゴバルド王国の地からかなり遠くに離れたところです²³⁾。実際、歴史的には781年に、ピピンがロンゴバルドの王に推戴され、パヴィアに居を構えながら、アルプスの向こう側に触手を伸ばしていました。ピピンが成人し、王位に就くと、さまざまな戦いが始まり、フランク族などの地域に遠征し、その周辺のゲルマン諸部族の貴族たちを打ち破っていきました。ただロンゴバルドの

諸侯はその周囲に領地を保っていました²⁴⁾。

北イタリアでは伝統を打ち破り、さまざまな改革がなされる原型ができ上がりましたが、それに比べて南イタリアでは伝統を重視する文化が深く根づいて北イタリアのような活力が漲ってくる環境は整いませんでした。そんな中に登場したのがアデルベルガでした²⁵⁾。

註

- 1) Acocella,N., *La cultura tradizionale dei Longobardi*, Spoleto, 1983, pp.520-23.
- 2) Delogu,P., *Mito di una città meridionale*, Napoli, 1977, p.21. そこでとりわけ Belting,H.の言質を引き合いに出している。
- 3) その中には、のちにベネヴェントの守護聖人になったビザンツの兵士の聖人である聖メルクリオのレリーフも含まれていた。
- 4) Delogu, op.cit., p.25. 聖人たちはキリストを通じて、王やその家族、そしてロンゴバルドの人々に介在するものとされていた。
- 5) De Renzi,S., *Storia documentata della Scuola medica di Salerno*, Milano, 1967, Documento 14, pp.XV-XVI. このように嬉々として暗示的な位置づけは、その地域を清め、これから誕生してくるであろう子供たちを受け入れやすくしていくことに役立っていた。
- 6) Paolo Diacono, *Acrostico sulle età del mondo*, Neff,K., ed., *Die Gedichte des Paulus Diaconus*, München, 1908, vol.2, pp.9ff..
- 7) Acocella, op.cit., pp.520-1. ここでCrivellucciの説を持ち出し、『ローマ史』そのものがベネヴェントで書かれ、編集された可能性があるとして述べている。その理由として、そこは当時の研究の中心地であり、ディアコノが満足するような典拠がたくさん備えられていたし、その中にエウトロピウスの作品もあったとしている。さらに、Bertoliniの説を取り上げ、『書簡集』の語調から、アデルベルガに捧げた部分から『ロンゴバルド史Historia Langobardorum』の編集へと結びついたのでないかと注目している。しかしながら、この刺激はそのうえに彼と深遠な友誼を契っていたアレーキの影響もないがしろにはできないと付け加えている。
- 8) Acocella, op.cit., pp.528-30.
- 9) Leonardi,C., “Paolo Diacono e la civiltà altomedievale”, *Paolo Diacono, Storia dei Longobardi*, Milano, 1985, p.16.
- 10) Soranzo,G., *Carlo Magno*, Brescia, 1946, p.37.

- 11) Gregorovius, F., *Storia della città di Roma*, vol.1, Torino, 1973, p.437.
- 12) それにGregorovius, op.cit., p.437にある“pro recolligendis illis in patribus situm patrimonium Apostolorum principis”である。
- 13) Bertolini, O., *Roma di fronte a Bisanzio e ai Longobardi*, Bologna, 1941, p.669.
- 14) この回廊に関しては、現在ラヴェンナ様式の柱頭で飾られた二本の貴重な列柱のみが修復されている。その列柱はアレッサンドロ・マンゾーニ Alessandro Manzoniの『いいなづけI promessi sposi』のヒロインであるエルメンガルダ Ermengardaに見立てられたデジデラータの悲哀な死の証拠ともなっている。また、この場所の雰囲気神秘的な神聖さを確認する精神を漂わせている。さらに、そこを訪れるものにアデルキの荘厳な歌声“Sparsa le trecce morbide…”が響くような感覚が残っている。その声には僧侶たちの低く、聖歌を歌っている声と彼女の死期に及んだ王女の辛いため息が混じっている。
- 15) Vergil. *Aen.* 682-692:
 “exstinxisti te meque, soror, populumque patresque
 Sidonis urbemque tuam. Date volnera lymphis
 abluam et, extremis si quis super halitus errat,
 ore legam”. Sic fata gradus evaserat altos
 semianimemque sinu germanam implexa fovebat
 cum gemitu atque atros siccabat veste cruores…
 Ter sese attollens cubitoque adnixa levavit,
 ter revolute toro est oculisque errantibus alto
 quaesivit caelo lucem ingemuitque reperta.
- 16) このような解釈を与えているのが、Manzoni, A., *Adelchi*, atto IV, coro. それと同時に彼女はサリ系フランク族の花嫁の間での嫉妬を感じていた。そしてその情熱を永遠の幸せを獲得することに向けていった。
- 17) そこには、アドリアーノ1世がロンゴバルド側を支持すれば、ローマとローマ領のイタリア半島とビザンツ領のイタリア半島が孤立することになりはしないかという懸念だった。
- 18) ここで、従属の意図も込めて、“De cunctis civitatibus Italiae”となり、実際には、Rex Francorum et Langobardorum, すなわちフランク族とロンゴバルド族の王の称号を受け、それがのちの神聖ローマ皇帝位になっていった。
- 19) Gasparri, S., *La cultura tradizionale dei Longobardi*, Spoleto, 1983, p.153: L'evoluzione del mondo longobardo, interrotta al nord con la conquista franca del 774, proseguì nella Longobardia minor, nell'antico ducato di Benevento. というふ

うに、イタリア北部にあったロンゴバルド王国と南部とのそれを maior と minor という語で区別している。そこには、ある種の断絶を伴っているようにも見えるし、ただ単に半島内での横すべりのようにも見える。

- 20) Cilento, N., *Le origini della Signoria Capuana nella Longobardia minore*, Roma, 1966, p.73: Assumeva le insegne sovrane ed elevava il ducato a principato indipendente; nello stesso tempo apriva la patria beneventana ai profughi che provenivano dal nord, a quei resti della sua gente che egli poi rexit nobiliter et honorifice, insediandoli appunto negli honores, e cioè nel dominio di terre. ここから、そのうえに、イタリア北部の旧領土からこの南部にロンゴバルドの人々が移動してきたことも理解できる。それは単に一般国民だけではなく、貴族層も含んでいる。いわゆるフランク族からの避難民と考えられる。
- 21) Berza, M., “Sentiment national et esprit local chez les Lombards meridionaux aux IX-X siècles”, *Revue Historique du Sud-Est.européen* XIX, 1942, p.368. アルプスの向こうからやってきた王に半島の領土が征服されたときから、ベネヴェント君主国は南イタリア全域に伸張していたのだが、イタリアに出現した新たな王国の中では半島統一をめざす意図は感じられなかったけれども、ロンゴバルドの人々に自由を提供することのできる最後の避難場所と見做されていたに違いない、と論じられている。
- 22) そこには、“*Coniux pulcherrima Regis, totum semper victura per orbem famosimeritis*”とある。パオロ・ディアコノが残した著名な墓碑銘だとされている。
- 23) その墓碑銘には、“*patriam bellis laceram iamiamque ruentem compare cum mango (Desiderio) relevans stabilivit et auxit*”とある。
- 24) Barbero, A., *Carlo Magno*, Bari, 2002, p.42: il risultato fu una transizione più morbida e quasi inavvertita dal vecchio al nuovo regime. Cf. Memoli Apicella, D., *Adelperga*, Salerno, 2004, p.90.
- 25) 北イタリアに関しては、Cingolani, S.M., *Le storie dei Longobardi*, Roma, 1995, p.142: Nord d'Italia, cioè il futuro regnum Italiae perse per primo la coscienza delle antiche tradizioni, le mutò in alter più significative per la nuova realtà.とあり、南イタリアに関しては、Memoli Apicella, op.cit., p.90: Nel Sud, invece, le tradizioni etniche rimasero più vive, grazie alle opera di Paolo Diacono e di Erchemperto, che ne furono cantori e scrittori insigni.とある。すなわち、南北の格差というものが芽生え始めていることを物語っている。